

若木仇名草（わかきのあだなぐさ） 上 虫尽し

へほとけの国も唐国も、固い言葉は表向き、その内証はやわらかな、神の教えし色の道へ名に流れたる市川屋、蘭蝶という鳥ならで、この榭屋に巢を組み、いつもねぐらと通いくる

へあとにふたりはすね合いの、果てしなければ蘭蝶は、ものをも言わず、ずっと立つをへ此糸は引きとめて

此糸「口し、どこへ行きなんす」

蘭蝶「どこへ行くこうとおかまいなさんな、俺が体で俺が足で、向うへでも隣へでも、好きな所へ行きやす」ト

へまた立ち上がるを

へ引き戻し

此糸「ほんに、あんまり虫がようありんすにえ」

蘭蝶「あい、お前に似てさ、下腹に毛虫のない恐ろしい蛇むかで、のまれぬうちにもう帰る、女房がまつ虫、さっぱり縁をきりぎりす、アノコごなしょにんのげじげじめ、紙に包んでおととい来い、あっちへいね虫」

へいなごいなごと蹴散らかす、身ぶりは中車高麗屋、市川流のくぜつなり

へ此糸はうらめしげに、男の顔を打ちまもり

此糸「お前のそうした癩癩はいつもの癖とはいいいながら あんまり邪険な心意気」

へ今更いうも、過ぎし秋、四谷で初めて逢った時、好いたらしいと思つたが、因果な縁の糸車、めぐる紋日や常の日も、新造かむろにねだらせて、呼んだ客衆の目を忍び、手管のとがめ鞍替えも、二所三所を流れ行く、勤める身も素人も、馴染み重ねた女気は実に変わりはないわいな

へよい気ならしいあてことは、聞こえぬおひととすがり付き、恨み涙ぞ道理なる

蘭蝶「そう言えばそんなものじゃが、ひよつと奥の客めが粹なやつで、そなたの気が変わろうかと、こりゃ信のこと、受け取って」

此糸「お前もマアそれほど気遣いなら、ちよつと覗いて見さんせ」ト

へ引きつれて襖の透き間

此糸「アし、あちら向いてる女中さん、わたしあそこへ行くほどに、とつくりと見せなせ」ト

へのれん押しあげ此糸は、

此糸「わざとお寂しうづいしたる」ト

へそばに居寄れば

お宮「アイ、お前にはお客が来たそうなが、蘭蝶というおひとかえ」

此糸「アイ、いいえ」

お宮「そりゃ誰さんでもかまわぬが、コレ此糸さん、お前はナア、お顔に似合わぬ恐ろしい恨めしいおひとじゃな、こう言つたら、あの女子は気違いか、とつけもないこと言つと思わんしょうが、わたしは、こなさんのお深間、蘭蝶どのの女房宮でござんすわいのウ」

此糸「エエ、アノお前が」

お宮「ササ、さぞびっくりさんしたろうが、わたしが今日来たのは、定めし逢つて存分言つかと思わんしょうが、そこをずっと取つてのけて折り入つての相談、とつくりと聞いてくださんせや、大方主の話で、何もかも聞かんして、知りぬいていさんしよが」